

# 《史料紹介》星野トミ「しどろもどろ記」

翻刻・解説 瀬戸口 龍一  
(大学史資料課)

## 【解説】

紹介する「しどろもどろ記」は、専修大学創立者の一人である田尻稻次郎の四女・星埜トミ(富)が、昭和三年(一九五七)の新春に父・稻次郎の思い出を書き記したものである。トミ七〇才の時であった。稻次郎は大正一二年(一九二三)八月に亡くなっているので、三十三回忌にちなんでのことと思われる。

トミは明治二〇年(一八八七)一二月に生まれ、昭和四一年二月に亡くなっている。後に日本銀行大阪支店長や川崎第百銀行頭取など務めた銀行家・星埜章と結婚。三男一女をもうけた。本史料の元となっている手書き原稿にはところどころ振り仮名が振ってあるが、これはトミの長女・キミが書き添えたものという文章が添えられてあった。

なお、この原稿(原本ではなく複写物)は、平成二〇年一月一日に田尻稻次郎の孫・館澤公美子氏より本学にご寄贈いただいたものである。氏は稻次郎の長男・鉄太郎の長女に当たる人物である。しかしその館澤氏も平成二四年一月一日に残念ながらお亡

くなりなられた。ご冥福をお祈りするばかりである。

次にこの「しどろもどろ記」が田尻稻次郎研究にどのような意味を持つのか考えることとする。田尻の生涯や業績を記した拙稿「日本における財政学の導入・構築と田尻稻次郎」(『専修大学史紀要 第四号』所収)には「田尻稻次郎を知るための参考文献」としていくつかの書籍や論文を掲げておいた。そのなかでも最も欠かせない文献を一つ挙げるとするならば、彼の後継者とも言うべき阪谷芳郎が中心となって結成された「田尻先生伝記及遺稿編纂会」が刊行した『北雷田尻先生伝』(以後、「田尻伝」と略)であろう。この伝記が最も詳しく田尻の生涯を述べたものであり、田尻に関する記述の多くはこの伝記を出典としている。

この伝記について簡単に紹介しておく、「田尻伝」は没後三年目の大正一四年八月に開催された「第四回田尻先生会」の席上において編纂計画が持ち上がり、昭和八年四月の「十年祭」挙行の際に護国寺の墓前に原稿を供え、同年一〇月に刊行された。資料収集・執筆に八年の年月をかけて編纂され、上下巻合わせて約一五〇〇頁

におよぶ大著である。その内容は伝記だけでなく、田尻を知る多くの人物たちからの人物像の聞き取り、大蔵省や会計検査院時代の事績、さらには講演録なども含まれており、まさに基本文献と言つてよい。

もう一点、自伝としては、明治四三年六月二八日に築地水交社において開催された還暦祝賀会の場での田尻の講演録がある。この講演は「田尻塾の還暦寿筵における田尻先生談話」と題され、『日本経済新誌 第七卷第一号』（一九一〇）に所収。後に「田尻伝」には収録されている。

この二つの文献が田尻研究のうえで基本的史料として使用されてきたわけであるが、本史料の一番の特徴は、先に挙げた二点の文献にはない田尻の父親像が描かれていることだろう。田尻の日記など日常を記録した史料が現存していないため、これまで田尻の家庭内での様子や妻である「祥」の人柄などはあまり知ることができなかった。その意味では娘の視点から見た新たな田尻像を生き活きた描写で紹介している史料は本史料以外にはないと言えよう。

田尻家の間取りも本史料によって初めて明らかにされた。また孫に対する田尻の対応などこの史料によってわかったことは数多い。しかも実の娘の言葉であるから史料批判を行う際にも、家庭に関することについては信用度は高いと思われる。こうした観点から鑑みても、本史料を紹介する価値は十分にあると考えている。

内容については、読んでいただければそのおおよそはわかると思

われるが、一点だけ解説を施したい。それは文中にある「神宮表参道ジャリ喰ひ事件」である。この事件は田尻が東京市長を辞任するきっかけとなったと言われる事件である。

田尻が東京市長に就任したのは大正七年四月のことである。第五代東京市長を務めた奥田義人が急逝したのが、前年八月のことで、半年以上も市長空席というある意味異常事態のなかでの就任であった。この事実だけでもこの時期の東京市政がいかに混乱していたかがわかるだろう。

娘であるトミも本史料で「其内図らずも東京市長にかつぎ上られてしまいました。名にし負ふ伏魔殿に入りましたので、仙人のような父が勤まる筈はありませぬ。」と語っているように家族も含めて周囲の人たちの多くが反対するなかで、田尻は市長になった。

そうした家族や友人たちの杞憂は的中し、各会派から広い支持を取り付けられないまま市長の座についた田尻は、就任当初から非常に厳しい議会運営を強いられる。田尻東京市長時代の東京市政の歴史的位置づけについては車田忠継氏の「東京市・市長と市会」の政治関係・田尻市政期における政治構造の転形・（『日本歴史』六四九号 吉川弘文館）に詳しいが、その車田氏の説に依拠しつつ、その経緯を述べることにする。

まず大正九年一月二六日の東京朝日新聞の記事は次のようなものである。

東京市は今や全く暗黒なり。適々正義の人あるも、周囲の雰

気に征服せられ、何等の事を為すを得ず。市長の如き徒らに位高く功成れる旧時代の人を拉し来たり、其の消磨せる意氣を買ひ、其の困迷せる態度を悦び、手も足も将た口も出す能はざるを徳とし、此の傀儡市長の下に、魑魅魍魎、有らん限りの百鬼夜行を極めんとす。助役の如き、廉直の人は之を逐ひて、私を営むに便せんとし、市吏員の如きも醜類一派は忽ち登庸せられ、然らざるものは之を誅る

記事によると、田尻は位は高く、功を成した人物ではあるが、旧時代の遺物であり、かつ「傀儡市長」であることから、現在の暗黒の東京市を治めることはできないと論じている。さらにその田尻の下で魑魅魍魎、百鬼夜行の役人たちが不正を働いていると弾劾しているのである。

この記事が出る前の同年一月一日、明治神宮鎮座祭が開催されたが、この最中にある事件が発生した。翌日の読売新聞には「参宮道路が崩れて又もや大問題」という見出しで記事が掲載されている。それによると、時の法務大臣・大木遠吉を乗せた自動車が神宮橋前で突然道路砂利の中に車輛が埋まって動けなくなったというものである。

実はこの事件は単なる事故ではなかった。その後の調査によって道路工事を請け負った業者と議員と役人との間に癒着があり、手抜き工事であったという事実が判明した。これがトミのいう「神宮表参道ジャリ喰ひ事件」である。この事件をきっかけに各新聞社はガ

ス代や電気代の値上げといった東京市と業者が関わっていたとされる汚職事件などの様々な問題を次々と追及・弾劾していく。その一つが前述した記事である。

田尻はこれらの問題の責任を取る形で一月二六日、自ら職を辞す。二年半の在職期間であった。田尻市長に対する人々の評価については、当時の新聞を見ても賛否両論ある。しかし学者や官僚としては著名でも、地方行政の経験のない田尻に市長が務まるだろうかという就任当初の疑問を最後までぬぐえなかったのも事実である。そうした世間の評価は家族の耳にも届いていたのであろう。だからであろうか家族にとっては、市長という職務についてしたことによって田尻の体調が損なわれてしまったという思いが強かったことが本史料から読み取ることができるのである。

#### 【凡例】

翻刻に際しては、仮名づかいは清濁、振り仮名もふくめ、原則として原本の通りとした。ただし、次の点は改めている。

・翻刻に際して漢字は常用漢字を用い、変体仮名、合字は通行の字体に改めた。(例) ㄱ→コト、ㅈ→トキ、ㅉ→トモ

・躍り字は原本どおりとし、漢字は「々」、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ゝ」、二字以上は「く」に統一した。

・適宜、句読点、並列点を補った。

・なお、史料中に、差別用語などの不適切な表現が含まれている場合があるが、歴史的な観点からそのまま掲載した。

## しどろもどろ記

わが父 序

人間として父は清廉潔白、少しも曲った事の出来ぬ立派な存在だったと思ひます。そしてとても常人の真似する事の出来ぬ変った処が多分にありました。それはやはり偉大だった為かもわかりませぬ。しかし明治から大正初期にかけての人ですから、我々明治時代の老人が感心している事も、今の世には一向通ぜぬ馬鹿くしい事ばかりと思ひます。とにかく書いて見たらといふ希望も御座いますので、父の生立、公職のことハ別に本もあります故、略しまして、たゞ子として頭に残って居る事をとりとめもなく並べて見ることに致しました。まづハ暫く御辛抱を

昭和三十三年新春

七十老婆

トミ記

あまりにも勝れし父を持ちし子は

いよ／＼我身の小さきを思ふ。

正二位、勲一等、子爵、法学博士、経済学博士・田尻稻次郎といかめしい肩書を持つて居る父も私共子の目にハ一人のきたない、やせた老爺として残って居ります。たゞ其澄んだ大きい目、あごの山羊髯は印象深いもので御座います。嘉永年間、鹿児島島の武士の家に生れ、明治初年をはじめて留学生が米国に派見されました時、最年少者として加へられ、数年間かの地で修業いたしました。帰朝後、直に官に就き、其後数十年間、官吏生活をいたしました。其間幾度か大

臣候補にも上りましたが、頑として受けず、大蔵次官、会計検査院長を奉職いたし、傍東大、早大、専大の講義を受持つて居りました。六十才を越えましてから引退、かねての希望を実現いたし、日本青年団のお仕事をして居りました。これで終りませば、父も幸福でした。其内図らずも東京市長にかつぎ上られてしまいました。名に負ふ伏魔殿に入りましたので、仙人のような父が勤まる筈はありませぬ。やがて神宮表参道ジャリ喰ひ事件といふいまはしい事が暴露いたしました。何分自分が若い時から身心を捧げて御奉公申上た明治大帝の御社のこと、父は恐懼以上のものを感じたらしく、即刻辞任いたし、誰が何と云つてもきゝ入れず、食を断ち、身を削つてひたすら謹慎して居りました。それまでハ少々の風邪や発熱でも休むといふことのなかつた身体もすっかり弱り果て、しまいました。遂に大正十年、大森の高台、馬込に小さな家を求め引移り、一切を清算してしまいました。其後ハ家にお籠り、読むこと、書くことに倦きますと、庭いじり等して居りました。こうなりましても好きなお酒はやめられませぬでした。恩賜の大きな石を庭に据え、自作の歌など添えて楽しんで居りました。有難いことに枢府入も決定致しましたので、私共喜んで居りました処、大正十二年八月十五日（関東大震災直前）、階段から足をすべらし、脳震とうを起し、七十才（かぞえ）で其まゝ世を去りました。

先づ、家から申ますと、小石川金富町の高台の突鼻、東西に長く、南西が開いて居る処に邸がありました。遙か西の空にハ箱根連山か

ら秩父の山々までがすっかり見晴されました。そして箱根山の上にハ美しく両裾を引いた富士山の全貌がかゝつてるといふ景勝の地でした。門から玄関までハ七、八間もありまして、細長い地所に後から後からとつぎ足した、だゝつ広い粗末な家でした。一番奥が洋室、十二畳程の父の書斎兼応接室でした。部屋の内部分、中央に大デスクが二つ、其まわりに椅子が四、五脚。飾ハ何もなく本ばかりうづ高く積み重ねてありました。偶にハ石炭ストーブが置いてありました。窓ハ南に三つ、西に一つ、上げ下げする硝子戸がはまつて居り、夏ハ下部だけ網戸を入れました。北にハ一間の腰高の窓がついていました。隣室に通ずるドアと、直接庭に出られるドアがありました。この室で父ハ接客、読書、著述等して居りました。服装ハ米国から持ち帰りました洋服を何十年も使用、破れた処にハ大小さまざまな布が当つて居ります。マンガに出てくるコジキと同じことです。父の号の北雷はキタナリに通じます。いよゝゝこれがどうにもならなくなつてからハ、兄や弟の学習院の制服をどうにか着られるようにして用ひて居りました。こんな事ハすべて母の仕事で御座います。冬の寒い時ハ其上に粗末な羽織を着、夏ハ時々木の浴衣を着て居りましたが、其以外、和服ハ一枚もなく、又足袋といふものをはいた事がなく、いつも靴下にスリッパをつっかけて居りました。父の持論として衣は肌を包み、清潔であればよいといふ事でした。別に礼装用としてフロックコートと大礼服ハ用意してありました。三大節（一月一日四方拝、二月十一日紀元節、十一月

三日天長節）に参内する時にハ大礼服（宮中の祭、祝典の時に着用）を用ひます。これハ両肩に金モールの房が下り、胴にハ金糸で桐の模様があり、肩から斜にかけられた巾広のリボンにハ大勲章、頸や胸にも大小の勲章が下り、ズボンにハ太い金綿が二本たてに通つてるといふ、スゴイ金ピカものでした。これに金の飾のついた短剣を下げた父の姿ハふだんがきたないだけ、余計立派に見えませんでした。はじめは馬で参りましたが、いつの頃からか二人引の人力車になりました。この金ピカを母の大きな黒い肩掛ですつぱり隠し、車上の人となります。これは外出中の兵隊さんが勲章に対して一々敬礼しなければならぬのが気の毒だからだそうです。しかし白い羽根のついた舟型の帽子をかぶつた父の顔は、晴々として居ました。食物はお酒吞でしたから甘いものハ一切いたゞきませぬ。煮物もオートミール等もすべて塩味でした。時間のやかましい人でしたので、食事時間ハ朝七時、昼十二時、夕五時半、六時とキチンときまつて居りました。食堂の中央にハ粗末な大テーブル、まわりに木製椅子といふ工合で、夕食には二本程の晩酌を楽しみながら、四、五人の塾生を相手に愉快に談笑して居りました。食事ハ母も子供も全て別で御座いました。又たまに早く帰宅する時にハ、ビールに塩煎餅位、其外の間食ハいたしませぬ。御弁当は梅干のはいった御むすび三つ、牛肉の煮たもの五切、おたくわん三切ときまつて居りました。これを別々に竹の皮に包み、新聞紙にくるむでポケットにつっこんで参ります。学校の講義にまわる時にハ、別にビスケット

を十個程、古封筒に入れて参ります。煙草ハ時々到来もの、シガーを吸って居りましたが、これもなければよいのでわざ／＼買うことハありませぬでした。さて日常生活ですが、嚴寒の時でも朝ハ大てい六時起床。出勤までに暇がありますと直径一寸程の鉄の棒をステッキがわりについて、庭を東から西へと何十回も往復して散歩します。通勤にハ雨の日も風の日も一切乗物を用ひず、電車線路をつたつてどこへでも歩いて参ります。在宅の時にハ氣に入りの植木屋の翁を相手に、暇さへあれば庭の手下、植木の移植、畑などを樂しむで居りました。一頃東北種の南瓜・冬瓜の栽培に興味を持ち、門内其他処きらわず、棚をつくりまして、期節にハ青、赤、薄色など大小の南瓜があちこちにブラ／＼下りますのを喜んで居りました。其一つ一つに弟や塾生がいろ／＼な顔を書いて、いたづらいたしました。冬瓜など二貫目位のが出来、床間へ飾つたりした事もありました。台所の外側にお米のとぎ汁をためる大樽を置き、朝夕それ等の野菜に白水をやるのも父の日課でした。日曜はいつも在宅なので朝からお客様です。玄關にハ木製の細長い魚型のドラが下つて居ります。それにハ田牛（タノモウ）と彫つてあります。たゞく棒は庭の松の枝に出来たコブを利用して父が作ったものです。父に面会の方はすべて庭から御案内します。用談の方はすぐ帰られ、雑談の方とハ食事も御一緒にします。どうかすると夜までお酒のつゞく事もあります。たゞ自分を利用される話とか、謝礼のことなどになりますと「ハア／＼ナルホド」の連発、しまいにハ

「今日ハ生憎田尻は留守で」「でも現におめにかゝつています」「当人が留守といふのは一番間違いない」とすまして新聞などをひろげて居ります。これでハどうにもなりません。訪客の相間ハ薪割です。エーイエーイと大声を出してナタを振り上げて居ります。とび散つた木屑を集め、自分で風呂をわかし、汗を流します。入浴の世話（と申しても、ぬるければたき、熱ければうめる程度）はすべて塾生の役で、女ハ一切よせつけませぬ。晩酌後の機嫌のいゝ時にハ頼まれた揮毫をいたします。字は下手です。墨がにじんでも字くばりが悪くても一向平氣、筆の向くま、独特の書体で書いて居りました。芝居はもとより、寄席、縁日など自分ハ勿論、家のもの、行くのもあまり好みませぬ。食事以外めつたに自室から出て来ませぬで、お正月など皆でカルタなどして居るのを生憎みつかりますと、「バクチをやつちよるか」など皮肉を申すこともありませぬ。父は不言実行の人で小言は申しませぬ。水道栓から水が垂れていればだまつて自分で止めます。マッチの使へる棒が落ちていればすまして拾つて来ます。子供等も父から何もやかましい事を云はれたことはありません。目を大変大切にする人で、夜、書見の時は帽子のヒサシのようなものを額にあて、燈火の直射を避けて居ました。それで子供が夕方薄暗い処で本でも読むで居りますと、「少しまで、ランプが来てからにせい」と申します。又ころがって雑誌でも見て居りますと、「目を痛めるぞ」と申しました。たまに云はれた事ハ今でもよく覚えて居ります。又自分がいゝと思ふことハ先実行いたします。

玄米食がいゝとなると、お釜から考案いたしましたして、自分が先いたゞきます。しかし家のものにハ決して強制はいたしませぬ。玄米パンの工場を経営させたりもしました。半搗米の普及にも努力しました。又、お正月の門松、御祭の提灯は無益と申し、いたしませぬ。市長時代にハ東京の街は狭いのに自動車は大き過ぎる、小型のものを作るべし、なほむやみに走り廻つて居てハガソリンもむだ、交通事故もふえる故、駐車場を設けるべきだなど申して居りますが、いづれも当時の笑ひ種となつて居ります。又一寸書くのを憚りますが、女子もサル又を用ふべきだといふ持論でした。こう書いて参りますと、父は実に木石のような冷たい人と思へませぬが、一面とても心暖まることも御座います。むづかしい法律や経済の著書にまじつて琵琶歌の本も二、三冊は御座います。人にハ厚く、自ら薄い人でした。在京たゞ一人の実兄を大切にいたし、その家庭のこともよく世話いたしました。たまに訪ねて来られますと心から歓迎いたします。私等年をとると兄弟といふものハあんなによくなくなるものかと思つた程でした。又訪客にも如何にもこだわりなく談笑して居りました。父のダジャレは有名なもので、講義の間にもよくシヤレをとばしたそうです。ある方が「先生はほんとうに多知(タシリ)だ」と云はれましたら、すぐに「否(稲)ゼロ(次郎)」と申しましたことハよく知られて居ります。門から玄関までの間が広がったので、その南よりの方に百坪余りの庭つきさ、やかなものを建て、塾と称して、高校や大学の学生をいつも四、五人御世話し

て居りました。所謂書生ではありませぬ。すべて無料、事情によつてハ学資の補助もいたしました。親類の子供や兄弟なども、ある年齢に達しますと、こゝに来て塾生と一緒に起居をいたします。食事は母家の父と同じ食堂へ皆来られました。暮からお正月にかけて、酒匂の松涛園に父は出掛けることがありました。其時も御供は男の子と塾生二、三人ときまつて居ります。そしてすべてを忘れ、ゆつくりと寛いて来るらしい御座います。忙がしい日常の為か、自分の子供達とハ用事の外めつたに口もき、ませぬでしたが、初孫なる私の長男を大変可愛がり、気のあつた方が来られますと、「コレがワシの孫ヂヤ」とわざわざ側へ呼びます。又自分で大きな木馬や三輪車等を買つて来たり、散歩の時「オジーサマにおぶつされ」とて例の鉄棒を片手につき肩へ孫をぶら下て歩き廻つたりしました。其後、私共日銀京都支店に勤務中、長男ハ小学に上り、字が書けるようになりましたので、オジーサマに手紙を出しました。其返事をそのまゝ、こゝに写します。「オー、ワジーサマハマキヲワツタリ、ハタケヲホツタリシテイルヨ、キサマモオーキクナツタラ、ハイガラナドヲカケテハイケヌヨ、ワジーサマノヨウニハタラカナクチャイケナイヨ」ゲーヨリ。端書の表は墨で星塾晴章様としてあり、裏は鉛筆で書かれ、しかもさかさまになっています。母はじめ子供等、父から端書などももらったことがないので、これは今でも大切に保管してあります。こんな事がありました。或夜、父の部屋に窓を破つて泥棒がはいつたのを、翌朝、母がみつけ大騒ぎとなりました。部

屋にハカーテンで仕切って、一間の押入のようなものがあって、筆筒其他のものが入れてありました。恩賜の金、銀、盃、刀、知名の方の書、画、其他少しハ金目のものがありました。何一つ手がついてなく、用筆筒の引出にあった小さな刀のめぬきが一つなくなっているだけでしたので、皆ホットして居りました。処が他日、其賊が捕はれ白状したそうですが、父の部屋にはいった時、あまりにキチンと片付いていて、何か俗離れのした妙な気持になり、気味悪く何も物色しないで逃げたと申しました由、壁には台湾の生蕃の使った武器や、フカの顎の骨など、グロ味たっぷりのものがかけてあり、うづ高い本やつぎだらけの洋服などに僻易したものと見えます。又或朝、弟妹等登校の為、縁側の偶の靴戸棚をあけましたら、父のつぎの当った靴が一足残っているだけで全部なくなつて居りました由、皆困っている処に父が出て来て、「オレのようなのをはいて居れば盗られる心配もない」と笑ひながら、其靴をはいてさつさと出掛けて参りましたとか。

こうした変り者の父につかえ、多くの子女を育て、塾生の世話、数多い召使のつかひわけ、母も並大抵なことではありませぬ。五尺にハ大分たりない小さな身体をして、一日中家の中をかけまわつて居りました。この母の力も誠に大きかったと思ひます。元始元年（明治の一代前）、江戸の旗本の家に生まれました母は言葉も丁寧で、行儀作法も心得て居りましたが、別に口やかましい事ハ申しませぬ。十多熟の子等にもガミ／＼ドナルことなどはありませぬでした。十

八才（かそえ年）で嫁に参り、翌十九才から実に四十七才まで子を産みました。あの小さな身体でよくもと皆云つて居りました。至つて楽天的な人で諦めもよかつたので、晩年の不幸にもよく打ち克ち、謹か四、五日の惱で昭和七年四月、六十九才で安らかに永眠いたしました。

終りに我々兄弟姉妹十一人のことを一筆書かせて頂きます。長姉は育たず、長兄健在（かそえ七十五才）、次姉二十三才にて病歿、私（七十一才）、長弟五十七才にて病没、次弟三十二才にて病没、末弟五十二才にて自決（海軍大佐でしたが、終戦後自分の御用はすんだとて北京にて）、長妹育たず、次妹健在（五十八才）、中妹健在（五十五才）、末妹健在（四十八才）。

毎年父母の命日にハ、今残つて居ります五人のもの、兄の家の両親の霊前に集ります。そしてとにかく我々ハ、この父の子であるといふ事を忘れずに生涯を終わらましようと言ひ合つて居ります。

金富町のことを書きましたので、自分にも娘時代のあつたことを思ひ、頭のすみにある古いものを一寸引出してみました。

ある冬の朝、父の部屋の窓をあけて

ほのかくと明けゆく富士のほ、えみに

かははづかしき、わがねざめかな

その後五十有余年、こ、等々力の隠居所の窓より

あかねさす富士のほ、えみ変らねど

しらがよしわよ、われ老ひにけり

終